



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



「グローバル人材」の育成のためのプログラム

国際学部

2018 合宿セミナー

国際キャリア教育プログラム

グローバル時代のキャリア形成を考える

国際キャリア教育

日時： 2018年9月15日（土）～ 17日（月）

Globalization and Glocalization

International Career Seminar

日時： 2018年10月6日（土）～ 8日（月）

【担当】
国際学科



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



国際キャリア教育プログラムとは

国際学部

以下の3つの授業からなる国際学部の専門科目です

- ①国際キャリア教育（社会・文化共通選択科目・2単位）
- ②International Career Seminar(専門外国語科目・英語・2単位)
- ③国際キャリア実習（社会・文化共通選択科目・2単位）

国際学部以外の学生も参加できます。毎年、全国の大学から参加者が集まる、学外に開放されたプログラムです。



【担当】
国際学科



2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



国際キャリア教育プログラムとは

国際学部

グローバルな課題を扱う職場で将来活躍する事を目指し、国内外の企業、NGO、公的機関等でインターンを経験し、国際的なキャリアの形成につなげています。長期休暇などを利用した80時間のインターシップです。



【担当】
国際学科

3 すべての人に
健康と福祉を



10 人や国の不平等
をなくそう



16 平和と公正を
すべての人に



HANDSプロジェクト (外国人児童生徒支援事業)

- ▷ 10市町との「外国人児童生徒教育推進協議会」
- ▷ 「多言語による高校進学ガイダンス」
- ▷ 外国につながる子どもを支援するすべての人が情報を
- ▷ 交換し相互に研修できる場を目的としたHPの開設
- ▷ 『中学教科単語帳』 『教育必携〜』 刊行
- ▷ 中学卒業後の外国人生徒進路調査
- ▷ 小中高等学校等へ学生ボランティア派遣
- ▷ 小中高等学校における国際理解教育の実践
- ▷ 教育現場、行政、NPO、地域等で外国人児童生徒やグローバル化に向き合う人材を育成するための授業「グローバル化と外国人児童生徒教育」を開講



【担当】
多文化公共圏センター

多文化公共圏センター事業

- グローバル教育
グローバル教育セミナー「難民問題とグローバル教育Ⅱ」の開催
- 学生国際連携事業
宇都宮大学生国際連携シンポジウム「中東理解連続セミナー」の開催
- 地域連携交流
 - ・国際交流都市日光の再発見—留学生と『まちづくりと観光開発』を考えるフィールドワーク及びシンポジウムの開催
 - ・益子における歴史的文化交流
 - ・福島原発震災に関する研究フォーラム



【担当】
多文化公共圏センター



環境と国際社会(基盤教育)

○この授業では、第二次世界大戦以降、戦後から今日にいたるまでの国際環境政治の歴史的展開を全体的に通観します。環境学の古典とも言われるレイチェル・カーソンの「沈黙の春」をはじめ、複数の文献や論争、そして環境上の重大事件や国際社会の対応を題材に、時代の変遷を学んでいきます。

○授業前半では、週末2日の時間をかけて、環境問題の原点としての足尾鋇毒事件の現場、足尾渡良瀬にも足を運びます。フィールドスタディから、環境問題が引き起こされている社会的構造を実感的に学び、持続可能な発展に向けての今日への教訓を探ります。



【担当】
国際学科
高橋若菜



環境と国際協力(国際学部)

今日、環境保護・保全の重要性は社会で広く共有されていますが、いかにして「環境」や「自然」の問題を解釈し価値をおき守るか、他に守るべき価値と競合する場合に何をどこまで守るかについては、往々にして意見や利害対立があります。授業ではグループディスカッションやロールプレイもまじえながら、環境問題をめぐる国際協力の現象を、事例検証を交えながら構造的に考察します。



【担当】
国際学科
高橋若菜



環境と国際協力演習(国際学部)

○この分野をより深く勉強したい方の為の演習です。専門的な文献の講読、フィールドスタディ、討論や議論を通じて、地球環境政治や環境をめぐる国際協力について、理解を深めます。また、地球環境保護・保全のための国や地方レベルでの取組みを比較考察し、国や地域によって取組みが異なる原因についても考察します。

○低炭素社会・循環型社会形成へ取り組む市民・企業・行政機関などへのフィールドスタディも実施しています。



【担当】
国際学科
高橋若菜



地球環境政策論(国際学部)

地球環境保護・保全のための各国の政策（国及び地方レベルを含む）について、学びます。具体的には、気候変動問題と原子力・再生可能エネルギー、循環型社会形成分野における各国の諸政策・取組みのなかから、複数事例をとりあげて比較対照し、基本的な理解を身につけます。またグループディスカッションやロールプレイもまじえながら、各国の取組が異なる要因や改善策についても考察していきます。



【担当】
国際学科
高橋若菜



ジェンダー論(バーバラ・モリソン先生担当:国際学部)

1960年代後半から性差別は大きな社会問題として顕在化しました。今日、国連では、「女子に対するあらゆる形態の差別撤廃に関する条約」が採択され、人間は生殖機能において男女は明らかに異なるもの(セックス)であるが、性格、能力、役割における男女差は後天的に形成されるもの(ジェンダー)で、「男らしさ」「女らしさ」を押し付けることは人間の自由な生き方や平等関係を損なうものであると認識されています。複数教員により開講されるこの授業では、環境分野からも、ジェンダーの問題について具体的に検討します。

【担当】
国際学科
バーバラ・モリソン、高橋
若菜

「環境国際規範のパラダイム・シフトと国内受容比較～欧州とアジアを事例として」(科研費基盤B 特設グローバルスタディーズ 研究代表者)

○循環型社会・低炭素社会形成に関連する国際規範におけるパラダイム・シフトを通時的に明らかにした上で、これらの国際規範とその変容が欧州とアジアの複数国・地域において、どのように受容され内面化されてきているかを、アクター・制度分析を通じて比較的明らかにし、差異が生じる要因について、政治・経済的要因を中心に、多視点的に推論を行うことを目的とする。国内外の研究者との学際的な国際研究。

○「国際規範の衝突、階層性、調整、融合～欧州とアジア、循環型社会形成分野を事例として」(基盤B)プロジェクトの継続版。

○国内外での学会発表・学術論文等あり。

○関連する社会貢献：NPO法人うつのみや環境行動フォーラム理事。複数の自治体における環境審議会、清掃審議会等委員。産業界の団体、市民団体、企業等での講演等。



【担当】
国際学科
高橋若菜

福島原発震災に関する研究フォーラム (2015ー)



○宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターのプロジェクトの一つであった、福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト（FSP：2011-14年度）を改組したものの、FSPでは、宇都宮大学国際学部附属2011年より、多文化公共圏センターの基幹プロジェクトの一つとして、地域の様々な社会グループと連携しながら、支援実践活動、調査活動、アドボカシー活動を展開してきました。

○FSPの活動全般を通じて、プロジェクトメンバーが痛感したのは、原発震災の問題は、決して福島に固有の局地的な危機ではなく、過去の国内外の環境災害にもみられたように、犠牲を一部の社会グループに押し付ける構造的な問題と認識されることです。宇都宮大学国際学部は、福島隣県に所在する数少ない人文・社会科学系学部として、各研究者のこれまでの研究や社会経験を活かしながら、福島原発事故がいかなる衝撃をコミュニティに与えたのかを程よい距離感でもって観察し記録することができる場所に立地されています。こうした記録を残すことは、地域社会、日本社会、そして国際社会への社会貢献であり、また後世への“社会的責務”とも考えています。

○こうした共通認識から、本年、FSPメンバーは、FSPのプロジェクトを、少し緩やかな組織形態であるフォーラムに改組し、これからも記録を通じて、問題構造を追究することにしました。具体的には、本フォーラムでは、2011年3月の東日本大震災以降に実施してきた福島原発震災の被災者支援・調査活動をもととして、福島原発震災が社会にどのような影響を及ぼしたかを構造的な視座から捉え記録し、社会に広く公表・発信していくことをめざしています。また、原発震災による被災者の困難は長期化していることをふまえ、現実の政策課題の提言につながるような研究をめざしています。

○関連する外部資金として、稲盛財団による研究助成、科研費（挑戦的萌芽、代表：重田教員；基盤C、代表：高橋）などがあります。FSPやフォーラムの枠組みで、数多くのシンポジウム、セミナー、被災者交流会等を実現し、書籍の出版も行い、メディアでも幾度か取り上げられています。また新潟県の委託を受けて、「子育て世帯の避難生活に関する質的・量的調査」も行い、行政の会議での発表なども行いました。

【担当】

国際学科

清水奈名子・高橋若菜・
阪本公美子・重田康博・
田口卓臣

越境大気汚染の比較政治学



○著書『越境大気汚染の比較政治学』（千倉書房、2017）は、2003年提出の博士論文を大幅加筆して出版した著作。日本学術振興会の出版助成を得て2017年度に公刊した。越境大気汚染管理は、なぜ欧州で先行し、北米は10年遅れ、東アジアでは未だ進展をみないのか？風上に中国・韓国を抱える風下国・日本の安全保障とは？本書は、膨大な一次データをもとに、三地域における越境大気汚染管理をめぐる地域環境協力制度の形成や発展の軌跡を、通時的、比較的、また多視点的に繙き、その全体像を理解可能なストーリーとして再構成し、政治の役割や情報公開、認識変化の重要性を論証した。

○公刊後、複数の研究会等で講演。大気質モニタリングの普遍性・汎用性の検討として、別研究プロジェクトにも着手（越境災害ガバナンス：基盤B 代表：阪本真由美、兵庫県立大学准教授）。

○関連する社会貢献として、環境省「H29年度東アジアの大気汚染に係る地域協力の推進方策に関する検討懇談会」委員就任。



【担当】

国際学科
高橋若菜

国際・専門科目「途上国経済発展論」 「アフリカ論」 基盤科目「アフリカ学入門」

○専門科目「途上国経済発展論」では、貧困や不平等、持続可能な発展のあり方について、私たちの生活と関連して学んでいます。

SDGに関連する具体的な指標についても学んでいます。

○「アフリカ論」の授業では、アフリカの貧困、食、子どもの健康、ジェンダー、紛争について学んでいます。

○「アフリカ学入門」では、アフリカの糶摺りや水くみを体験し、女性の労働についても考えます。



【担当】
国際学科
阪本公美子

東アフリカ(タンザニア)における在来知・在来資源に基づく生活改善



- 「東アフリカの野生食用植物・在来食の可能性—タンザニアにおける栄養分析を通して」(2018 - 2021年度)：野生植物や在来食の栄養価に関する調査を行い、それらの生かした生活・栄養改善を提案します。
- 「在来知の格差・近代的変容・革新—タンザニアにおける薬草資源と諸アクターの役割」(2015 - 2019年度)：薬草資源がどのように活用されている研究し、地域の人々の健康管理のために、その知識の共有・保全を行っています。
- 「生存をめぐるパラドックス—乳幼児死亡を軸としたタンザニア最貧困地域の比較研究」(2013 - 2016年度)：食の分かち合いが子どもの生存に寄与していること、在来食のモロコシの効果을明らかにしました。
- 研究では、女性に焦点を当てるとともに、在来資源の持続可能な利用を意識しています。



【担当】
国際学科
阪本公美子



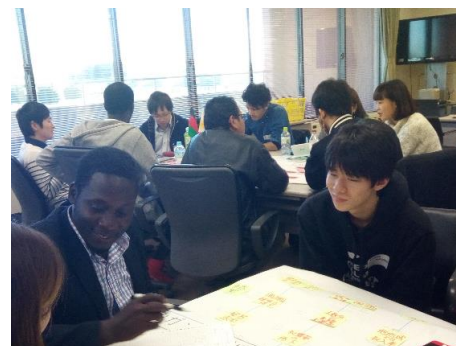
2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です



海外フィールドワーク演習(国際) 国際協力の課題と実際(農他)

国際学部

国際学部と農学部による共同授業。
2018年度より単位化および全学部受講可。それぞれの学部での学びと専門性を共有しながら、国際協力の現場と現状を理解する。JICA筑波でのアフリカやアジアからの長期研修生との交流、3月には海外研修（希望者）を実施し、学内での学びと現場を結びつける。



【担当】
国際学科
農業環境工学科

4 質の高い教育を
みんなに



10 人や国の不平等
をなくそう



5 ジェンダー平等を
実現しよう



【担当】
国際学科
栗原研究室
農業環境工学科
福村研究室

UU-TEA Project (JICA草の根技術協力支援事業)

「スリランカ紅茶プランテーション農園コミュニティの小学生への課外活動支援」

○農園内コミュニティの青年層への課外活動運営研修

○青年層による、農園内小学校3校での自習支援

○子どもたちによる課外活動の企画・立案の支援

○宇都宮大学学生と紅茶農園の子どもたちとの交流





グローバル・イシュー研究演習Ⅰ・Ⅱ

国際学部

○本演習は、「アクティブ・ラーニング」科目である。多文化公共圏センターの協働の下「グローバル教育セミナー」の企画・運営・インタビュー・訪問等を通じて、学生が「グローバルな実践力」、「将来のキャリア形成への意識」を獲得する。

○本演習は、学生が主体的な学びを通じて、グローバル・イシューについて理解しかつ認識を深め、地球にある諸問題の解決に対して積極的に行動していただくための「グローバルな実践力」や「将来のキャリア形成への意識」を養うことを目的にする。



【担当】
国際学科
重田、阪本
留学生・国際交流センター
湯本



国際・専門科目「国際法」「国際人権論」 基盤教育科目「国際化と人権」



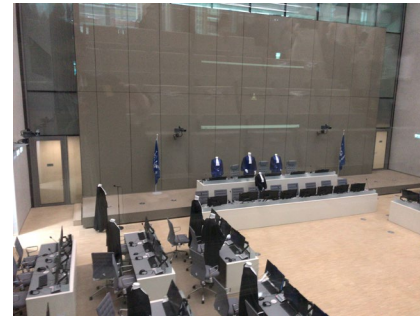
○専門科目「国際法」では、紛争が発生したときに、法がどのように機能するのか、また、そもそも国際社会のルールとは何かについて学んでいます。SDGsと国際法との相違の興味深いポイントについても講義でお伝えします。

○「国際人権論」の授業では、国際的な人権保障のフレームワーク、紛争のメカニズム、平和構築、国際刑事司法、真実の究明、和解について学んでいます。

○「国際化と人権」では、平等の概念についてジェンダー平等政策から紐解いたり、また、難民と国内避難民の相違や日本国内外の難民政策の比較検討についてディベートを行っています。



ゼミ生と平和宮にて



国際刑事裁判所の法廷



実務経験に基づく講義

【担当】
国際学科
藤井広重



国際法演習(国際学部)、「International Humanitarian Law in Theory and Practice」(全学)、国際人道法ロールプレイ大会・国際人道法模擬裁判国内予選会宇都宮大学チーム指導教員(全学)



○「国際法演習」では、国際刑事裁判所の機能ついて、アフリカを中心に事例研究に取り組んだり、希望者多ければ模擬裁判を実施しています。

○「International Humanitarian Law in Theory and Practice」の授業では、国際人道法の知識に加えて、人道支援の現場で求められるスキルを習得するために様々な規範をロールプレイを通して学びます。

○国際人道法ロールプレイ国内予選大会と国際人道法模擬裁判国内予選会へ出場する宇都宮大学チームを指導しています。学内選抜をするときがありますが、国際学部の学生に限定せず全学からの参加が可能です。

○研究室のHPはこちらです。 <https://www.fujiih.com/>



国際法演習での模擬裁判の様子



IHLロールプレイコンテストへの出場



国連職員(UNDP)による講演会

【担当】
国際学科
藤井広重



国際人権人道規範の地域社会における受容プロセスに関する研究:SDGsを通じたグローバルな人材育成の試みを通して



○「本研究プロジェクトは、「平和の担い手」と呼ばれる人材育成を実践することを通し、大学生自らが能動的に学ぶ環境を創出しながら、ここでの学びが地域に還元され、さらに受容されていくプロセスについて解明します。具体的には、SDGsの土台にもなっている国際人権人道規範から地域に還元すべく課題を特定します。そして、本研究で大学生の育成を通じた大学と地域との連携事例を蓄積することで、地域における産学官連携の推進に貢献する理論的視座の発展とモデル化を試みています。

○本研究に関しては、日本国際連合学会若手研究者旅費助成の支援を受け、2019年11月に韓国で開催された国連学会東アジアセミナーにて「A Localized Approach to Implementing the SDGs through Collaborative Efforts between University and Municipality: A Case Study of Utsunomiya, Tochigi Prefecture」と題した研究報告を行いました。

○以下の取り組みは、藤井研究室および顧問を務めるサークル「宇都宮国際平和と司法研究会」の所属学生が中心となって、国際人権人道に関する国際規範を学び、これを地域において実践・還元したこれまでの主たる成果です。

- ・2019年5月のグローバルガバナンス学会において、本研究プロジェクトに参加している藤井ゼミの学生3名が国連平和維持活動をテーマにポスター発表を行い、学部生部門で学会奨励賞を受賞。
- ・2019年7月10日に小山市で小学生を対象としたグローバルイシューに関するクイズ大会のイベントを開催。
- ・国際赤十字委員会主催国際人道法模擬裁判、国際人道法ロールプレイ大会への出場。
- ・2019年9月オランダのハーグでゼミ合宿を行い国際刑事裁判所の裁判官・職員や在オランダ日本国大使館の職員へのインタビューを実施。帰国後にオープンキャンパスでの報告会を開催。



オープンキャンパスでの展示



学会奨励賞受賞の報告



小学校でのイベントの実施

【担当】
国際学科
藤井広重



アフリカにおける法の支配と国際刑事裁判所

1 貧困をなくそう



10 人や国の不平等をなくそう



16 平和と公正をすべての人に



○本研究は、国際刑事裁判所（ICC）による司法介入に対し特に反発が強かったアフリカ諸国を対象として、司法介入に至る過程とその後の影響をアフリカの「内」の政治動学と「外」のアフリカ連合や国際刑事裁判所締約国会議といったアリーナやフォーラムでめぐらされる交渉との相互作用を明らかにすることで、国家と国際機構との関係性をめぐる理論的発展に貢献することを目的としています。そして、アフリカにおける「法の支配」の概念の変容を捉え、平和構築における我々外部アクターからのアプローチを見つめ直す作業を行っています。



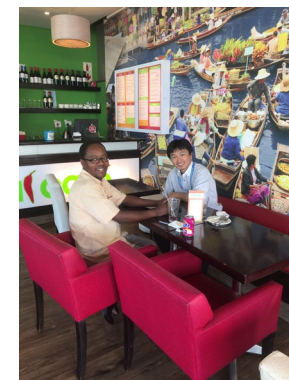
ナミビアでの調査



マラウイでの調査



マリへの政府専門家派遣



南アフリカでの調査

【担当】
国際学科
藤井広重